

巻頭言

この夏、人から紹介していただき、下程勇吉・教育人間学研究会著『教育人間学の根本問題』（燈影舎 2000年）という本を読む機会を得た。下程勇吉（1904-1998）は、「天道と人道：二宮尊徳の哲学」で京都大学文学博士号を取得、1951年に京都大学教育学部長となった。皇紀夫によれば、下程は、「一九五〇年代後半からドイツの精神科学的教育学とくにボルノウ教育学の影響を受けて、六三年京大に「教育人間学講座」が設置されるにもなって、下程がこれを担当した」という。『教育人間学の根本問題』では、教育人間学の三原理として、「代理不可能性の原理」（「その人独自の代理不可能的な人格」（p. 23））、「現実性の原理」、「隣接性の原理」（「各人の「もちまえ」を生かしつつ深くつながる隣接的人倫統一」（p. 132））が挙げられている。教育人間学の根本問題は、いかにして自己の確立と社会性の確保を統一し、主客合一の道を開くかということにあるという（p. 106）。とりわけ、現実性の原理の節では以下のように述べられている。

自他の実在性として「もちまえ」を全面的に生かし、自他の「つながり」を深めて、自他ともに生きる「よろこび」に達するように、「現実との生きた接触」がふかめられるとき、全人教育は成立するのである。（p. 38）

こうした「生きた接触」の一例として、同書ではデューイの経験主義の教育も取り上げられている。この「生きた接触」には、「自己自身との生きた接触」も含まれ、そこに「自己受容」の全人教育的意義もある（p. 123）。さらには、ディルタイに言及しながら「「全体のための利益」に貢献するために、社会の問題を解決するところに、生きる「よろこび」を覚える全人教育はいわば社会的知性の教育に焦点を結ぶといわれる」と述べられる（p. 132）。隣接性の原理の節では、「他を生かすことにおいて、自己自らが豊かになるとともに、自己自らを生かすことにおいて、他を豊かにする」という自他の受容と生かし合いが全人教育の一要素として述べられている（p. 154）。

これらの記述を通底する全人的な教育の構想は、臨床教育学・教育人間学という学問のルーツ、そして臨床教育学コースの歴史を振り返ると同時に、時代の要請に応じてこれからの臨床教育学コースをいかに作っていくかを構想する上で、ひとつの示唆を与えてくれるものであった。臨床教育学・教育人間学とは一体いかなる学問かを問う上で、全人性は、多彩な研究題目を通底するひとつの共通項であると言える。臨床教育学・教育人間学は、柔軟で流動的で境界を定めない緩やかな学問領域である。それは教育哲学研究や教育思想史研究などの領域画定をされた研究領域と重なりつつも、それらとは本質的に異なる外向きで学際的な教育研究の新しい形である。そしてその開かれた学際性の核心にあるものは、自分は何者か、人がよりよく生きることはどういうことか、人間とは何か、いかなる社会を創ってゆくのか、という個と人類の終わりなき完成に関わる問いである。こうした人間やよりよき生き方をめぐる問いは、教育「学」という学問分野に閉ざされることのない、多様な学と学をつなぐ媒体としての広義の教育——そこに向けて多様な学問のディシプリンが関連性をもつような研究のフィールドとしての教育——に関わるものである。こうした開かれた学問分野としての臨床教育学・教育人間学は、今、世の中で問われている互いに関連しあう人類の諸問題——環境、平和、経済、社会の不平等、貧困、医療、ジェンダーなどの実践的な諸問題——に関与しその問題解決に資するような、理論と実践をつなぐ動く学問であり、フィールドとのつながりを不可欠とする「生きた接触」に支えられる学問であると言える。

この意味での臨床教育学・教育人間学は、人の幸福と生き方を問う広い意味での哲学——専門哲学に閉ざされず、広く生き方を問い、人間変容に関わる「おとなの教育としての哲学²⁾」——とも不可分である。

そのような臨床教育学・教育人間学の実験的な試みとして2021年度は、2020年度より臨床教育学コースの研究者としてお迎えした秋山知宏先生（神戸情報大学院大学・客員教授）との共同授業で、「教育人間学概論」の実験的授業をオンラインと対面を組み合わせで行っている（図1参照）。私は正しい生き方をしているだろうか。私は何者なのか。パーソナルな問いから万人の気づきにつながる道筋をいかに築くことができるか。単なる知識ではなく、何のために生きるのか。生きる目的を学問とはいかなるものか。幸せな生き方につながる労働とは何か。働くことを通じた人間の成長とは何か。——こうした自己の探求と生き方に関わる問いを投げかけながら、デューイの『民主主義と教育』や『公衆とその諸問題』のテキストを読む。同時に、よりよき生き方を働く中で模索し実践する企業経営者や医療従事者たちに隔週でご講義をしていただき、理論と実践をつなぐ授業を試みている。社員が人身事故を起こして人の命を奪った後に、トラックの背面に子どもの絵を描いて事故防止に取り組んだトラック会社の社長さん、少年院出院者の自立支援に携わっておられる会社の社長さん、障がい者雇用を行っている会社の社長さん、がんサバイバーへの全人的治療に従事する医師の方。一見すると教育とは関係のないように思われる方々のお話は、生き方を問い、自らの志す職に身を投げ、世の中に貢献することを伝える中で、学生たちに、生きること、学ぶこと、教えること、成長することに関わる様々な問いを提起して下さっている。また、学問を抽象的で世の中の事象から隔離された安全領域で思弁的に行うだけでなく、いかに世の中の問題を解決できるかという実践的視座から見つめなおす機会を与えてくれている。授業は、20代の若者から50代の大人まで世代を超え、理系と文系の分野を超え、アカデミズムの内外をつなぐ〈超〉学際的な対話の場を生み出している。さらには、こうした境界を超える多様な人びとの出会いと交流は、オンライン授業を通じて加速されていることも大きな特徴である。

教育人間学概論 2021
（京都大学／齋藤直子・秋山知宏担当）

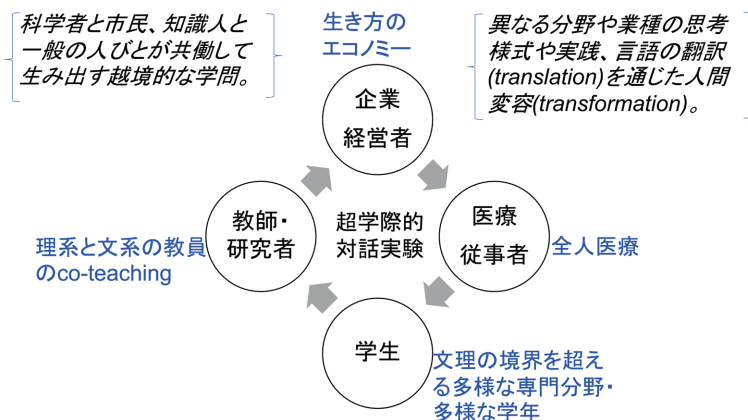


図1

臨床教育学コースは、その始まりから、理論と実践の融合、および、学際的な性質を特徴とするものであった。それは、思想研究、テキスト解釈を行う場であると同時に、フィールドの多様性や世の中の問題に拓かれ、「生きた接触」を推進するコースとなる可能性を秘めている。本編に所収された諸論文はそのような可能性を具体的に示す論考の数々である。教員と大学院生の研究の成果と同時に、「特集」では、2021年2月に、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン教育研究所のポール・スタンディッシュ先生のご協力を得て、同研究所との国際合同授業の成果として生み出された両機関の学生の英語論文が所収されている。こうした多彩な活動の中から、世の中の問題に目を向け、科学と倫理をつなぎ、人文社会科学と自然科学を統合し、様々な学問の壁を越え、国境を越え、言語を翻し、生命、身体、宇宙、環境、宗教に関わる対話の媒体者となりうる幅広い視野を備えた人物が世界に向けて羽ばたいてゆくことを願っている。

2021年9月13日

齋藤直子

註

1) 皇紀夫「下程勇吉の教育人間学——教育人間学の誕生と展開」『日本の教育人間学』（玉川大学出版部1999), p. 116。

2) Stanley Cavell, *The Claim of Reason: Wittgenstein, Skepticism, Morality, and Tragedy* (Oxford: Oxford University Press, 1979), p. 125.